最優秀賞（文部科学大臣賞）
〈自由創作部門　一般の部〉

たぬきのひとりごと

凪野（なぎの）　むあ

私はしがらき焼きのたぬきです。生まれは忍者（にんじゃ）で有名な甲賀（こうか）の里。でも忍者ではありません。私の仕事はサービス業とでも言うのでしょうか、旅館の入り口で、お客様のおむかえや、お見送りをしております。

しかし、春のうららかな、天気のいい日は困（こま）ります。サボるつもりはありませんが、つい、うとうと、ねむたくなってしまいます。先ほどは、桜（さくら）の花びらに、おこされてしまいました。

桜の花びらはおしゃべり好きです。あちらこちらで聞いてきた話を、私の鼻先やかさの上、はらの上に舞（まい）おりて、みんなでペチャクチャおしゃべりをします。内容（ないよう）はすぐに忘（わす）れてしまうような、たいした話ではありません。私はいつも聞いているだけです。しかし今日は、気になることを話始めました。

「この旅館は、たてかわるらしいのよ。」

「古いからね。でも、げんかん先だけ、新しくするそう。」

「旅館をやめる。という話も聞いたけど。」

私はビックリしました。

私は、だんな様からこの旅館につれてきていただいて、五十年たちます。一日も休まずお客様をおむかえ、お見送りしてきました。ついにおはらい箱になるのでしょうか。

私は桜の花びらに、くわしいことを聞こうと思いましたが、桜の花びらは気まぐれです。風に吹（ふ）かれて、すぐにどこかへ飛んで行ってしまいました。私は心配になりましたが、次々とお客様が到着（とうちゃく）されたので、お仕事の方をがんばりました。

ある晩のことです。ゴロゴロと台車の音がして、人が近づいてきました。月が出ている明るい晩です。私は、だんな様だと、すぐに分かりました。

だんな様は、私の鼻先を手の平でなでると、私を抱え台車に乗せました。

私は桜の花びらの話を思い出しました。

これはきっと、お役ゴメンでいらなくなり、燃えないゴミ置き場にでも、持っていかれるのだと思いました。

しかしだんな様は、げんかんから中へ入り、当店じまんのろてん風呂へ、私をつれて行かれたのです。

「今までがんばってくれたな。」

だんな様はそういうと、私にお湯をかけて洗い始めました。バラの香りのするボディシャンプーです。顔やかさや、とっくり、すみずみまでていねいに、洗ってくださいました。でもカメのこたわしです。少しチクチクします。私を洗った後は、だんな様もはだかになり、湯ぶねに入りました。

「気持ちいいだろう。うちは美肌の湯だからな。きっとつやつやの肌になるぞ。」

だんな様はそう言われますが、つやつやの自分をそうぞうすると、少しはずかしくなりました。

私は重いので深い所は、沈んでしまいます。だんな様は私を、浅い所においてくださいました。胸のあたりまでお湯がきています。なんて気持ちが良いのでしょう。私は長い間ここで働いてきましたが、温泉に入るのは初めてでした。

（ごくらく　ごくらく）

だんな様は、私の頭にタオルを置いて笑っています。空にはお月様。お湯にもお月様が写っています。

なんだかのぼせてきました。

風呂からあがると、だんな様は私をていねいにふいてくれて、かみの毛はありませんが、ドライヤーでかわかしてくれました。

そしてまた私は、台車に乗せられたのです。
次の行先は、旅館のうらにある、だんな様の家でした。女将さんは三年前に亡くなり、だんな様は、ひとりでくらしています。お仕事の方は、むすめさん夫婦が、旅館をきりもりされています。
だんな様は私を、玄関から和室まで、抱えて運ばれました。だんな様の腰のことが心配で私はひやひやしました。そして、床の間の前にざぶとんをひき、私を置いてくださいました。
「一杯やろうと思ってね。たぬきもきらいじゃなかろう。」
私の前にお酒がおかれました。きらいであろうはずがありません。大好きです。
「いい酒だぞ。」
私はえんりょなくいただくことにしました。
「実は、旅館を改装することになってね。今度作る旅館は、『しがらき焼のたぬきはにあわない』ということなんだよ。すまないね。」
これは『別れのさかずき』だと思いました。
「どうだい。これからはここで、いっしょにくらそうじゃないか。」
私はびっくりしました。これは『ちぎりのさかずき』でした。
「わしはな、最初は番頭として働いて、女房がこの旅館の一人娘でね、養子になったというわけだよ。それからがんばったよ。」
だんなさまの昔話です。
「お客様が、たのしそうな顔で帰られる姿が、一番うれしかったな。」
私もそうです。
「そうだそうだ。たぬきをこの旅館へ連れて来たら、女房がえらく気に入ってね。『たぬきの顔を見ていると、今日も笑顔で、お客様をおむかえしようって思うの』って言っておったな。」
私は、時々女将さんから見つめられて、はずかしくなる時がありました。

だんな様は私をあいてに、ずいぶん長い時間、昔話をされました。でも飲み過ぎたのでしょうか、横になり、ねむられたようです。まだまだ夜は冷えます。このままでは、かぜをひかれてしまいます。横には、はんてんがありますが、私からは届きそうにありません。

私が困っていると、どこかのまどがあいていたのでしょうか。一枚の桜の花びらが、ひらひらと入ってきました。

「桜の花びらさん、だんなさまにはんてんをかけてくれないか。」

私は桜の花びらにたのんでみました。

するとすぐに、台所の方から、そよそよと風がはいり、大勢の桜の花びらが、風に乗ってやってきました。そして花びらは、はんてんを浮かすと、そっとだんな様にかけてくれました。

私はお礼を言おうと思いましたが、桜の花びらは気まぐれです。すぐに出ていってしまいました。

明日からは、だんな様を相手にくらしていくことになりそうです。どうやら、私も、ねむたくなってきたようです。

おやすみなさい